

ヴォルテールと民衆

渋谷直樹

I. はじめに

ジャン・カラスなど冤罪事件の犠牲者のために戦い続けたヴォルテールの姿からも、彼が民衆に対し絶えず関心を寄せ、同情していたことは紛れもない事実である。ところがその一方でヴォルテールは、彼らへの軽蔑の念も完全には捨て去ることができなかつた、ということも否定できない。とりわけヴォルテールにおいて農民は激しい侮蔑の対象となっていたのであるが、ジョン・ヘンリー・ブラムフィットが指摘するように、1734年の『哲学書簡』では法律や学問の研究者、商人、職人だけがヴォルテールには民衆と見なされ、1748年の改訂版で農民もついに彼らの仲間入りを果たすこととなる¹⁾。従ってこれらの職業に携わる者たちがフェルネーの長老が考える民衆の構成員であり、本論でもそれを踏まえ農民をも含めて「民衆」と定義しよう。そしてブラムフィットはヴォルテールの中で農民が民衆に昇格した理由を、彼が戦闘的な気分になったからであると指摘している²⁾。またロイ・ポーターにおいても、ヴォルテールが肉体労働者や農民を家畜として描いたのは、人間を野獣にまで貶めた体制への非難からであるとされている³⁾。このようにこの2人の批評家は、民衆に対するヴォルテールの態度の中に、政治的な意図を見出し

1) John Henry Brumfitt, *The French Enlightenment*, coll. « Philosophers in Perspective », Londres et Basingstoke, Macmillan, 1972, pp. 71-72.

2) *Ibid.*, p. 72.

3) Roy Porter, *The Enlightenment*, New York, Palgrave, 2001 (1990), p. 24.

ているのである。確かに彼の初期作品、とりわけ悲劇では、民衆への不信任感を表明する発言が目立っている、と言えよう。

だがある時期を境にして、彼らに対して今までとってきた態度をヴォルテールは改めるようになる。彼の心の中に民衆への信頼感が生ずるのである。そしてこの心境の変化は、民衆の識字率の上昇に起因していると考えられる。さてここで再び言葉の定義が必要となる。現代では「識字」とは読み書きのできる能力のことを言うが、18世紀以前はむしろ読む力のことを「識字」と呼んでいた。また「非文盲」という語も、書くことはできないが読むことはできる、という人の能力を意味することから、当時の「識字」と同義語となる⁴⁾。このことは今後ヴォルテールの見解を読むにつれて、彼が書く能力は言及せずに読む能力を重要視していることが分かる。従って本論では、「識字率」を調べる場合は書かれたものがその調査の対象になることから、当然書く能力が前提条件として含まれているのであるが、それ以外では書くことができなくとも読むことができれば、「識字」「非文盲」という語を同じ意味として用いる。では本題に戻ろう。こうした民衆と識字との関係を重要視するに至ったフェルネーの長老の態度を、ロバート・ダーントンは否定的に捉え、彼を「上流の大弁護士」の代表者と見なしながら、ヴォルテールは大衆が非文盲化することには警戒心を抱いていたと主張している⁵⁾。同じようにアルベルト・マンゲルにおいても、民衆の読書がもたらす危険性について警告を発している彼の姿勢が強調される⁶⁾。しかしながら、ヴォルテールは各地で民衆が読むという能力を徐々に身に着けているという現状を知ったことで、彼らも自分の作品を通して啓蒙することができる、と信じる

4) 松塚俊三・八鍬友広「識字と読書——その課題と方法——」『識字と読書——リテラシーの比較社会史』、松塚俊三・八鍬友広編、昭和堂、2010年、7頁。

5) ロバート・ダーント『革命前夜の地下出版』、関根素子・二宮宏之訳、岩波書店、1994年、17頁。

6) アルベルト・マンゲル『読書の歴史——あるいは読者の歴史』、原田範行訳、柏書房、1999年、307頁。

ようになったのである。

これらの批評家とは逆に、ピーター・ゲイは民衆が非文盲化したことから生じた彼らへのヴォルテールの信頼感に触れ、彼の心情の転換期を推測しているが、ゲイはその根拠を彼の態度を軟化させるきっかけとなったジュネーヴの下層民との交流と、彼が友人に宛てた1通の書簡だけを頼りに、1760年代と想定するに止まっている⁷⁾。しかしながら、1760年にはすでにヴォルテールは民衆に対して期待を寄せ始めていたのである。そしてこの彼の心境の変化が民衆の非文盲化と深く関わっていた、ということをしかりと把握することこそが、ヴォルテールと民衆との関係を知る上では必要不可欠となる。もちろんだからといって、彼が全ての民衆に期待を寄せるようになった、という訳では決してない。ただ以前のように単に民衆と聞いただけで頭ごなしに彼らを見下すのではなく、読むという能力を身につけた者に対しては、彼らも教育を受けるに充分値するとヴォルテールは認めるようになったということである。やがてこの受け入れが、民衆の中に今まで眠っていた理性が近い将来目覚めるであろう、という民衆の秘めた力を彼に信じさせる結果となる。このような確信は彼の多くの後期の悲劇に見出され、いやむしろ彼の晩年に書かれた演劇の主題は、民衆を期待するヴォルテールの思いに満たされている、と言っても過言ではない。それでは、本論では先ず民衆に対する彼の軽蔑と心境の変化とを一望する。次にその変化のきっかけとなったフランス人の識字率について詳しく調べ、最後に民衆の潜在能力に期待を寄せるヴォルテールの見解を検討する。これらの考察によって、民衆の非文盲化という視点から彼らの力を信じようとするフェルネーの長老の新たな姿勢が明らかになると思われる⁸⁾。

7) Peter Gay, *The Enlightenment : An interpretation -The Science of freedom*, New York et Londres, W. W. Norton et Company, 1996 (1969), pp. 521-522.

8) 本論ではヴォルテールの引用に関しては、以下の略号を用いる。Voltaire (François Marie Arouet, dit), *Œuvres complètes de Voltaire*, Voltaire Foundation, 1968- (OC) ; *Œuvres complètes de Voltaire*, éd. Louis Moland, Garnier frères, 1877-1885, 52 vol.

II. 民衆への軽蔑から信頼へ

1718年初演のヴォルテールの処女作『オイディプス』では、イオカステのかつて恋人ピロクテテスを先王ライオスの殺害者と信じ込んでいる民衆に対し、現王の腹心であるヒダスプが次のように非難している。

根拠のない神託に堅固に支えられている祭司は、
 君主にとってしばしば恐ろしい存在となります。
 また盲目的な熱情に駆られた執拗な民衆は、
 愚かな神聖な絆の崇拝者であり、
 敬虔さから最も神聖な法を踏みにじりながら、
 王を裏切ることと神々を讃えていると思込んでいるのです⁹⁾。

ヴォルテールは登場人物の口を借りて、何の判断もせずに聖職者の言葉を信じてしまう、民衆の盲信と彼らの凶暴性との関係を批判している。さらにこの台詞には、ルイ14世の遺言状を破棄し摂政政治を行ったオルレアン公に追従しながら、太陽王の今までの恩を何のためらいもなく忘れてしまう民衆の軽薄さに対する非難も含まれている。それから7年後に上演された悲劇『ヘロデとマリアンヌ』も、民衆を「自分の王に対し

(M); *Œuvres complètes de Voltaire*, éd. Condorcet (Marie Jean Antoine Caritat, marquis de), Kehl, La Société littéraire-typographique, 1785-1789, 70 vol. (K); *Correspondance*, éd. Theodore Besterman, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1977-1993, 13 vol. (GC); *Œuvres historiques*, éd. René Pomeau, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1957 (GH); *Mélanges*, éd. Jacques Van Den Heuvel, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1961 (GM). なお、個々の作品に編者がそれぞれいる場合は、初出のみ校訂者と出版年を、それ以外の作品については出版年だけを記す。2回目以降は演劇の場合は、タイトル、幕（ローマ数字）、場（算用数字）、行数、話者を、その他のジャンルはタイトルと頁数だけを示す。またタイトルの後に示された年数は、ヴォルテールの作品自体の初演、執筆もしくは出版の年を示すものであり、引用の下線はすべて筆者による。

9) *Œdipe* (1718), éd. David Jory, *OC*, t. 1 A [2001], III, 5, v. 253-258 [Hidaspe].

では絶えず不当に満ちた振る舞いをし、話をすれば厚かましく、気紛れに対しても盲目的に身を任せている¹⁰⁾」と咎めている。またイギリスに追放の身となったヴォルテールが帰国後初めて上演した1730年の悲劇『ブルートゥス』では、民衆の気質が軽蔑を込めた調子で列挙される。

[...] 御し難く残酷で、
怒りが彼らを導き、集まっては離散し、
憎しみにおいても愛においても分別を失い、
脅したり、恐れたり、一日の内で支配したり仕えたりもする¹¹⁾。

この戯曲では民衆の歯止めの利かない盲目的な性格が非難の対象となっている。さらに1732年の『カエサルの死』でも同じ見解が、今度は統治者の視点から述べられる。

私は民衆がどういう輩かは知っている。彼らを一日で変えられるのだ。
彼らは自分たちの憎しみも愛情も容易く振りまく。

[...]

民衆を陥らせる深淵を花で飾り、
引きずり込むまさにその瞬間、この虎を一層喜ばせ、
打ちのめしながら気に入られ、彼らを服従させ魅了せねばならない¹²⁾。

民衆の移り気な性格を最大限利用しながら、彼らを支配しようと目論むカエサルの考えを通して、民衆に対する軽蔑がしっかりと確認できる。1751年に刊行された歴史書『ルイ14世の世紀』においては、オランダで起

10) *Hérode et Mariamne* (1725), éd. Michael Freyne, *OC*, t. 3 C [2004], I, 1, v. 9-10 [Mazaël].

11) *Brutus* (1730), éd. John Renwick, *OC*, t. 5 [1998], I, 2, v. 71-74 [Arons].

12) *La Mort de César*, éd. D. J. Fletcher, *OC*, t. 8 [1998], I, 4, v. 287-295 [César].

きた暴動を例にとりヴォルテールは民衆の残忍さについて言及している。

抑制の利かなくなった下層民は、ハーグでウィット兄弟の2人を虐殺した。民衆はあらん限りの凄まじさで、血だらけに染まった死体に対し狼藉を働いた。これはあらゆる国民にも共通する恐怖である。下層民は至る所でほとんど同じなのだから¹³⁾。

ヴォルテールは民衆の凶暴性を彼らの本質と見なし、また下層民と民衆という語を同義語として用いているが、彼はこの2つの語を1766年に友人のダミラヴィルに宛てた手紙の中で次のように定義している。

私は民衆という語を、生きるために自分の腕しか頼れぬ下層民の意として用いています。私にはこの階級の住民たちが、学ぶ時間や学ぶ能力をいつの日か持ち得ることができるかどうかは疑わしいものです。彼らは哲学者になる前に餓死してしまうことでしょう¹⁴⁾。

この発言から民衆という語が、自分の腕しか頼れぬ者、つまり肉体労働者や農民、職人を指していることが分かる。確かに彼らの日々の過酷な状況下では、何かを学ぶ時間などとても持ち得ないという現実を認める一方で、ヴォルテールは彼らの理解力にも疑いの眼差しを向けている。さらに2年後の1768年には「靴直し職人や女中たちを啓蒙しようなどとは決して誰も主張したことはありません。それが使徒たちの宿命なのですから¹⁵⁾」と、ヴォルテールは教育を施す必要のない職業を示しながら、彼らの仕事を天職であると決めつけている。従って彼は50年もの間、民衆を軽蔑していたのである。その上この感情はヴォルテールの中からそ

13) *Le Siècle de Louis XIV*, GH, chap. X, p. 720.

14) Lettre à Damilaville, 1^{er} avril 1766, GC, t. VIII [1983], p. 422.

15) Lettre à d'Alembert, 2 septembre 1768, GC, t. IX [1985], p. 600.

ののちも消え去ることはなかった。

しかしながら、彼が下層民と呼んでいた全ての民衆を教育に値しないと考えていた訳ではない。ヴォルテールは民衆と呼ばれる者の中にも啓蒙するに相応しい者がいるということを見出し、彼らに期待を抱くようになるのである。この彼の心境の変化についてピーター・ゲイは、ヴォルテールが1760年代半ばにジュネーヴの最下層民である「生民」に接する内に、彼らにも読む力があるという事実を知ったことがその大きなきっかけであった、と指摘している¹⁶⁾。そこでゲイは自分の見解の正しさを証明するために、1767年にヴォルテールが当時弁護士であったランゲに宛てた次のような書簡を提示している¹⁷⁾。

自分たちの仕事上よく考え、美的感覚を磨き、知識を広げねばならない最も熟練した職人につきましては、彼らはヨーロッパ中で読むという能力を持ち始めているのです。[...] 違います、いいですか、民衆が知性を持っていることに気づいた時、全てが失われるのではありません。反対に民衆を牛の群れのように扱う時、全てが失われるのです。と
いいいますのも、遅かれ早かれ牛は角であなたを突き刺すでしょうから¹⁸⁾。

最初ヴォルテールは職人たちに限定して述べているが、やがて民衆と言い直したのち、読む力を獲得したことで己の能力を自覚した彼らを、これまでのような同じやり方で今後も扱うことに対してランゲに警告を発している。というのも、読むことで知識を得た民衆は自分たちが今まで置かれ続けていた不当な境遇に疑問を持ち始め、やがてそれは権力に逆らって戦おうという意欲を、彼らに与えることになるからである。だが決してヴォルテールは、民衆を邪険に扱ってきた自分たちの身を彼らか

16) Peter Gay, *op. cit.*, pp. 521-522.

17) *Ibid.*, p. 522.

18) Lettre à Linguet, 15 mars 1767, *M.* t. 45 [1881], p. 164.

ら守るために、ランゲに注意を促しているとは考えられない。そうではなく、民衆への従来の軽蔑的な接し方を改めることで、彼らの力を結集させ世の不正に対し彼らを勇敢に立ち向かわせることができるのではないかとフェルネーの長老は期待しているのである。そして最終的にピーター・ゲイは、民衆を侮蔑し続けていたヴォルテールの態度が軟化し始めた時期を漠然と1760年代と定めているが、ジュネーヴの生民に関するエピソードや彼が引用した書簡の年代のことを考慮するのであれば、ゲイはむしろヴォルテールの転換期を1765年以降と見なしている感が強い¹⁹⁾。ところが、この批評家が提示した手紙よりも7年も前に書かれたヴォルテールの作品の中に、先に見た同じ見解をすでに確認できるのである。彼は『愚者のための考察』でこう述べていた。

もし支配されている大多数の者たちが牛であり、支配している少数の者たちが牛飼いであるのなら、少数の者たちは大多数の者たちを無知の状態に留めておくことにこしたことはない。

しかし、物事はそう上手くは運ばない。長い間角しか持っておらず、赤貧の状態にあったいくつもの民族が考え始めるのである。

ひとたび思考するというその時が訪れたのなら、精神が獲得した力をそこから奪うことは不可能なことだ。野獣は野獣のように扱わねばならぬように、考える者は考える者として接しなければならないのである²⁰⁾。

ついに民衆は考えるようになったのである。そして先ほどのランゲに宛てられた手紙と照らし合わせれば、民衆が思考することができるようになったのは、彼らが読むということができるようになったお陰である、と捉えているヴォルテールの姿がはっきりと浮かび上がって来る。同時

19) Peter Gay, *op. cit.*, p. 522.

20) *Réflexions pour les sots* (1760), *M*, t. 24 [1879], p. 121.

に彼は、知識を得ることで思考力を身に付けるようになった民衆の精神は、いずれ今までのような隷従的な態度でもっては権力に屈しなくなるであろう、と予見しているのである。この見解は4年後の1774年にショーヴラン侯爵に宛てられた手紙の中ではっきりと述べられている。

私が目にする全てのものが革命の種を蒔いています。革命は必ず起こるでしょうが、私は残念ながらそれを目にすることはできません。フランス人は何事にもせよ遅れて到着するのですが、最終的には辿り着くのです。精神を照らす光は少しずつですが着実に広がっております。従いまして、機会があり次第人々の怒りは爆発し、その時こそ一大センセーションを引き起こすことでしょう。若い人たちは大変幸せ者です。彼らは素晴らしいものを目にするのですから²¹⁾。

確かにこの発言には革命 (révolution) という語が用いられているが、ヴォルテールが君主制の崩壊を望んでいたとは考えにくいのであって、彼はただ信教や出版、表現の自由、さらには税制改革といった社会制度の是正という意味で用いたように思われる。それよりもこの引用で着眼すべき点は、知識の光によって照らされた精神は社会悪に反旗を翻す力を民衆に与える、ということである²²⁾。以上のことを踏まえると、ピーター・ゲイが指摘していた時期よりも早い段階、つまり1760年にはすでにヴォルテールは民衆に信頼を寄せるようになっていた、と言うことがで

21) Lettre à Bernard-Louis Chauvelin, 2 avril 1764, GC, t. VII [1981], p. 646.

22) ロバート・ダーントンは民衆と宮廷人との間に起こった対立に注目し、民衆が貴族たちに疑問を抱くようになった背景には、当時出回っていた「手書き新聞」(Nouvelle à la main) といった誹謗文書が存在が大きかったと指摘している。彼によれば、これらの情報は主に宮廷における噂を扱っていたが、民衆は冗談として受け止めず、また多くの誹謗文書は卑猥であったにもかかわらず、いたって道徳的でもあったことから、庶民の倫理観とお偉方との倫理観の対立を招いたのである。ロバート・ダーントン、前掲書、263-264頁。

きる。ところで、民衆に対して彼の蔑視が和らいだのには、民衆の非文盲化という現状が深く関わっていると考えられるのであるが、では当時の識字率は実際どのくらいであったのであろうか。次章ではそれを検討したい。

Ⅲ. 17世紀末と18世紀末の識字率

近代以前の人々の読み書きの能力の獲得を調べるには、結婚証明書の自署がその対象となる。そこで署名の数を判断基準とした識字率を表にまとめるが、1世紀の間の推移を比較検討するためにも、18世紀末（1786-1790年）の各地方と各県の識字率だけでなく、17世紀末（1686-1690年）の同地方・同県の識字率も示すことにする。なお括弧は女性の識字率を示している²³⁾。それでは先ずフランス北部から眺めることにしよう。

①フランス北部（Alsace 地方は両世紀末共に不明である）

(1) Basse-Normandie

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Calvados	65(35) %	85(65) %	Manche	35(15) %	85(65) %
Orne	45(25) %	65(45) %			

Calvados 県は17世紀末からすでに識字率が高く、Manche 県は18世紀末に一気に識字能力が男女共に50%も上昇している。

23) 以下、天野知恵子『子どもと学校の世紀——18世紀フランスの社会文化史』、岩波書店、2007年、52-53頁に載せられている、François Furet et Jacques Ozouf (sous la dir. de), *Lire et écrire : l'alphabétisation des Français de Calvin à Jules Ferry*, t. 1, 1977, pp. 59-60 の地図を参考にして表を作成する。また1786-1790年の男性の識字率については、Pierre Goubert et Daniel Roche, *Les Français et l'Ancien Régime*, t. 2: « culture et société », Armand Colin, 1991, p. 202の地図を資料として用いる。なお、各県の識字率は20-29%、30-39%というように色違いの模様によって示されているため、それぞれの県の識字率の割合を示す時は25%、35%という中間のパーセンテージで試算してある。

(2) Champagne-Ardenne

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Ardennes	55(25) %	75(45) %	Aube	45(15) %	65(25) %
Haute-Marne	35(15) %	75(35) %	Marne	65(25) %	75(45) %

Haute-Marne 県以外は17世紀末でもすでに識字率が高く、18世紀末には平均的にどの県も識字率が伸びている。

(3) Haute-Normandie

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Eure	45(15) %	75(55) %	Seine-Maritime	35(15) %	65(45) %

2つの県は共に18世紀末の男性の識字率が30%伸びている。また女性の場合でも Eure 県では40%、Seine-Maritime 県でも30%と識字率の上昇が目立っている。

(4) Île de France (Paris 市の17世紀末、18世紀末は共に不明となっている)

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Essonne	45(15) %	95(35) %	Hauts-de-Seine	45(15) %	95(35) %
Seine-et-Marne	45(15) %	65(35) %	Seine-St-Denis	45(15) %	95(35) %
Val-de-Marne	45(15) %	95(35) %	Val-d'Oise	45(15) %	95(35) %
Yvelines	45(15) %	95(35) %			

パリを中心とするこの地方の各県の男性の識字率は、17世紀末においても45%とすでに高く、また Seine-et-Marne 県を除けば18世紀末の男性は95%と最高の識字率を示している。だがそれとは反対に、女性の識字率が伸びていないのが特徴的である。そしてこの研究書ではパリの識字率は不明となっているが、これに関してはダニエル・ロッシュが「結婚証明書」ではなく「遺書」の署名からパリの識字率を調査している。彼によれば、17世紀末のパリの識字率は男性が85%で女性が60%、また大革命前には男性が90%で女性が80%となっている²⁴⁾。従って、同地方圏内の

24) ダニエル・ロッシュ「社会生活のなかの文字文化 —— 十八世紀フランスの都市の

7つの県と比較すると、17世紀末のパリジャンとパリジェンヌの識字率は2倍も高く、とりわけパリの女性の識字率は、大革命前には男性に引けを取らないほどかなり上昇していたことが分かる。

(5) Lorraine

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Meurthe-et-Moselle	45(25)%	85(60)%	Meuse	55(25)%	95(65)%
Moselle	45(15)%	85(55)%	Vosges	35(15)%	95(65)%

17世紀末の Vosges 県の男性の識字率が18世紀末には60%の上昇率を示しており、女性も50%の伸び率を示している。また Lorraine 地方の18世紀末の女性の識字率は、パリほどではないが平均して高くなっている。

(6) Nord-Pas-de-Calais

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Nord	35(5)%	55(25)%	Pas-de-Calais	35(25)%	45(35)%

両県の男性の識字率の伸び率は今まで見た他の地方に較べ高いとは言えないが、Nord県の女性の場合は、20人に1人の割合から4人に1人が読み書きができるようになった。

(7) Picardie

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Aisne	55(25)%	65(45)%	Oise	55(25)%	75(45)%
Somme	45(15)%	65(45)%			

Somme 県の女性の識字率が17世紀末から18世紀末にかけ30%も一気に上昇している。また18世紀末の女性の識字率はどの県も45%と他県との開きは見られない。

場合」『書物から読書へ』、ロジェ・シャルチエ編、水林章・泉利明・露崎俊和訳、みすず書房、1992年、251頁。

② フランス中部

(1) Bourgogne

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Côte-d'Or	25(15) %	55(25) %	Nièvre	5(5) %	15(5) %
Saône-et-Loire	15(15) %	25(15) %	Yonne	35(15) %	45(25) %

Côte-d'Or 県と Yonne 県の男性の識字率は18世紀末にはある程度伸びてい
るものの、他の2つの県では1世紀を経ても読み書きの能力は低いまま
である。

(2) Bretagne

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Côtes-d'Armor	15(5) %	25(5) %	Ille-et-Vilaine	25(15) %	25(15) %
Finistère	15(15) %	35(5) %	Morbihan	15(5) %	5(5) %

この地方は全体的に見て男女の識字率は17世紀末も18世紀末も低迷して
いる。

(3) Centre-Val-de-Loire

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Cher	25(15) %	25(5) %	Eure-et-Loir	35(25) %	45(25) %
Loiret	25(15) %	35(25) %	Loiret-et-Cher	25(15) %	35(15) %
Indre	15(5) %	15(5) %	Indre-et-Loire	共に不明	25(15) %

Eure-et-Loir 県の男性の識字率が18世紀末に辛うじて45%となっているが、
残る全ての県では両世紀を通じて識字率は高いとは言えない。

(4) Franche-Comté

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Doubs	35(15) %	85(35) %	Haute-Saône	15(5) %	65(25) %
Jura	35(25) %	85(25) %	Territoire-de-Belfort	共に不明	5(不明) %

Territoire-de-Belfort 県を除いた男性の識字率は18世紀末に50%も一気に上昇しており、反対に女性はそれほど伸びていない。

(5) Pays de La Loire (Vendée 県は両世紀末共に不明である)

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Loire-Atlantique	15(5)%	25(15)%	Maine-et-Loire	15(15)%	15(15)%
Mayenne	15(5)%	25(15)%	Sarthe	15(15)%	25(15)%

この地方全体の識字率は両世紀共に低いが、Loire-Atlantique 県と Mayenne 県の女性は、1世紀を経て10%上昇し他の2県の女性と同じ識字率となった。

(6) Poitou-Charentes

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Deux-Sèvres	15(5)%	35(5)%	Charente	15(5)%	25(5)%
Charente-Maritime	35(25)%	55(35)%	Vienne	15(5)%	15(5)%

Charente-Maritime 県は他の県に較べれば男女共に識字率は高いと言えるが、Deux-Sèvres 県の男性は17世紀末には低かった識字率が18世紀末に35%に上昇している。

③ フランス南部 (Corse 島は両世紀末共に不明である)

(1) Aquitaine (Dordogne 県は両世紀末共に不明である)

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Gironde	15(5)%	25(15)%	Landes	5(5)%	5(5)%
Lot-et-Garonne	5(5)%	25(5)%	Pyénées-Atlantiques	25(5)%	75(5)%

Pyénées-Atlantiques 県だけは18世紀末に男性の識字率が75%と17世紀末から50%も急上昇しているが、他の県は低いままである。

(2) Auvergne

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Allier	15(5) %	15(5) %	Chantal	25(15) %	25(15) %
Haute-Loire	15(5) %	35(15) %	Puy-de-Dôme	25(15) %	25(25) %

Haute-Loire 県の男性だけが辛うじて、17世紀末の15%から35%に伸びている。とはいえ女性の識字率については、Haute-Loire 県よりも Puy-de-Dôme 県の方が高い。また18世紀末の Puy-de-Dôme 県の女性の識字率は、Chantal 県の男性と同じであり、Allier 県の男性にいたっては、Puy-de-Dôme 県の女性の識字率の方が高いくらいである。

(3) Languedoc-Roussillon

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Aude	15(5) %	35(15) %	Gard	35(5) %	55(15) %
Hérault	25(5) %	45(15) %	Lozère	共に不明	55(15) %
Pyrénées-Orientales	5(5) %	25(15) %			

Lozère 県の17世紀末は不明なので伸び率は確かめられないが、同県を除けばどの県の男性の伸び率は20%である。ただ Pyrénées-Orientales 県の男性だけはそれでも低く、また女性の18世紀末の識字率に関しては、どの県においても15%と低迷している。

(4) Midi-Pyrénées (Lot 県は両世紀末共に不明である)

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Ariège	5(5) %	25(15) %	Aveyron	共に不明	35(15) %
Gers	25(15) %	35(15) %	Haute-Garonne	5(5) %	15(5) %
Hautes-Pyrénées	25(5) %	45(5) %	Tarn-et-Garonne	15(5) %	15(5) %
Tarn	15(5) %	15(5) %			

18世紀末の Hautes-Pyrénées 県の男性の識字率は45%と他の県に較べれば高いと言えるが、反対に同県の女性の識字率は低いままである。

(5) Limousin

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Corrèze	15(5) %	25(15) %	Creuse	15(5) %	15(5) %
Haute-Vienne	5(5) %	15(5) %			

どの県も17世紀末、18世紀末と男女共に識字率は低いものの、Corrèze 県の18世紀末の女性の識字率は、他の2県の男性と同じ識字率となっている。

(6) Rhône-Alpes (Haute-Savoie 県と Savoie 県は両世紀末共に不明である)

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Ain	5(5) %	25(15) %	Ardèche	25(5) %	45(15) %
Drôme	25(15) %	35(15) %	Isère	15(5) %	35(15) %
Loire	15(15) %	25(15) %	Rhône	15(5) %	35(25) %

Ardèche 県の18世紀末の男性の識字率は45%と比較的高い。女性の識字率に関しては、Rhône 県が18世紀末に20%上昇し25%に伸びている。これは Ain 県と Loire 県の18世紀末の男性の識字率と同じである。

(7) Provence-Alpes-Côte d'Azur (Alpes-Maritimes 県は両世紀末共に不明である)

県名	17世紀末	18世紀末	県名	17世紀末	18世紀末
Alpes-de-Haute-Provence	35(15) %	45(25) %	Bouches-du-Rhône	15(5) %	35(5) %
Hautes-Alpes	65(25) %	75(25) %	Var	15(5) %	25(15) %
Vaucluse	15(5) %	25(5) %			

フランス南部の(1) Aquitaine 地方の Pyrénées-Atlantiques 県と同じように、Hautes-Alpes 県の18世紀末の男性の識字率も南部においては75%と最高値を示している。反対に同県の女性の識字率は伸びていない。また Alpes-de-Haute-Provence 県の18世紀末の男性の識字率も南部の中では高いと思われるが、伸び率で見ると Hautes-Alpes 県と共に1世紀を経ても10%しか伸びておらず、むしろ Bouches-du-Rhône 県の方が20%上昇している。

さて1686-1690年と1786-1790年における各地方・各県の男女の識字率を比較したのであるが、その結果フランス北部の識字率が中部、南部に較べてかなり高いことが分かる。さらにここでフランス全体の識字率の平均値についても付言しておく、ロジェ・シャルチエによれば17世紀末期は29%となっている²⁵⁾。そして1780年代にはフランスの総人口2600万人に対し960万の者が読み書きをすることができた、というラインハルト・ヴィットマンとロバート・ダーントンの報告から、平均は37%ということが分かる²⁶⁾。さらに前者は1789年の平均値にも触れ40%と見積もっている²⁷⁾。従って平均値だけで見ると、1世紀の間でフランス人の識字率は8%の上昇となる。だがこれは逆の言い方をすれば、ヴォルテールが生きていた1694年から1778年の間に、フランス人の識字率の上昇率が8%を超えることはない、ということでもある。とはいえ結果が分かっているからといって、彼が生きていた当時の識字率の考察が無駄になるということにはならないであろう。それでは次に1700年代から1780年代までにかけての識字率を考察する。

IV. 18世紀初期から後期までの識字率と読み物

18世紀中葉のフランス人の識字率の平均値は、ロルフ・エンゲルジンの概算では全体の35%とされている。これに対し18世紀中葉のイギリスにおける識字率は、イングランドとウエールズがそれぞれ53%、スコットランドは75%であったことから、フランス人の識字率はイギリスに較べればかなり低いということが分かる²⁸⁾。その上フランスの1780年代

25) ロジェ・シャルチエ「書物から読書へ」『書物から読書へ』、前掲書、93頁。

26) Reinhard Wittmann, « Was there a reading revolution at the end of the eighteenth century ? », in *A History of reading in the West*, éd. Guglielmo Cavallo et Roger Chartier, trad. Lydia G. Cochrane, Cambridge, Polity Press, 1999, chap. 11, p. 288 ; ロバート・ダーントン、前掲書、235頁及び312頁（注17）。

27) Reinhard Wittmann, *op. cit.*, p. 288.

28) ロルフ・エンゲルジン『文盲と読書の社会史』、中川勇治訳、思索社、1985年、

の識字率が37%であったことを考えると、18世紀中葉から30年の間にフランス人の識字率はわずかに2%の上昇を示しているに過ぎない。だが18世紀の識字率を考察の対象とする場合、フランス全人口の識字の平均値を確認したとしても、識字能力を獲得した民衆が増えている、という考えに至ったヴォルテールの判断理由を捉えることはできない。というのも貴族や高位聖職者たちの識字率は前世紀からすでに高い数値を示し続けているのであり、従って彼らと民衆の識字率とを一緒にして算出された平均値は、民衆の間における識字率を正確には示さないからである。やはりヴォルテールが民衆と見なす一集団が、さまざまな業種を持つ人々から構成されている以上、職業別に識字率を調べることこそが、彼と民衆との関係を把握する上で大変重要であると思われる。つまり民衆のそれぞれの業種内において、どれだけの人が読み書きをすることができるようになったのか、そこにヴォルテールは着眼しているということである。

先ずはパリにおける職業別の識字率を表でまとめる²⁹⁾。なお括弧は女性の識字率を表しており、またパーセンテージはその職業に携わる者の内、どれだけの人が読み書きをすることができるか、という割合を示したものである。

年代 \ 職業	被雇用者	奉公人	職人	日雇い労働者
1700年頃	61% (34%)	80-85%	不明	不明
1720年	不明	不明	80%	50%
1774年以降	64%	ほぼ100%	不明	不明

パリでは18世紀初頭にすでに奉公人でも80-85%の識字率を誇っていた。

119頁。またエンゲルジンはドイツにも触れ、書くことはできないが読むことができる者は、1770年でも全人口の15%しかおらず、1800年になっても25%にとどまっている、と報告している。同書、119頁。

29) ダニエル・ロッシュ、前掲書、252-253頁。この統計は遺産目録から識字率が引き出されている。

また日雇い人でさえ半数以上は読み書きができたのである。次にフランス中東部ブルゴーニュ地方のヨンヌ県の職業別識字率を見るが、ここで括弧のパーセンテージは、その職業に携わる者の妻の識字率を指している³⁰⁾。

年代 \ 職業	賃金労働者	農民	職人	貴族・ブルジョワ・商人
18世紀中頃	10 (1) %	28 (7) %	49 (14) %	100 (73) %
18世紀末	15 (4) %	43 (18) %	52 (21) %	100 (100) %

ヨンヌ県における賃金労働者の識字率はほとんど伸びを見せていないが、農民は半世紀の間に一番の伸び率を示しており、職人と較べても10%弱の違いしか見られない。また農民の識字率に関して、ダニエル・ロッシュがフランス西部の識字率を報告している。この地域圏の都市における1668-1700年の男性の識字率はすでに50%であったのにもかかわらず、1780-1789年になっても60%と10%の上昇率しか示していない。これに対して都市近隣地域の農民男性は、1780-1789年には都市の男性の識字率と同じ60%に達しており、上昇率でいえば都市を大幅に上回っていたのである³¹⁾。さらにこのフランス西部の結果をイギリスと比較してみる。エンゲルジングによれば、イギリス都市部では1754-1762年に識字率が60%から74%に、同時期の農村部では48%から64%に上昇している。そう考えれば、都市部の識字率においてはイギリスには敵わないものの、農村部の識字率についてはフランスも引けを取ってはいない、ということが分かる³²⁾。さて今度はリヨンの職業別の識字率を調べてみる³³⁾。

30) ジャン・エブラール「ヴァランタン・ジャレム＝デュヴァルはいかにして読むことを学んだか——独学の模範例」『書物から読書へ』、前掲書、44頁。

31) ダニエル・ロッシュ、前掲書、250-251頁。

32) ロルフ・エンゲルジング、前掲書、119頁。

33) Pierre Goubert et Daniel Roche, *op. cit.*, p. 203. この統計はMaurice Garden, *Lyon et les Lyonnais au XVIII^e siècle* (Les Belles Lettres, 1970) から引用されており、また

年代\職業	細民	帽子職人	指物師	石工	靴職人	パン屋	絹織職人
1728-1730	30(18) %	32%	48%	25%	64(31) %	65(62) %	71(43) %
1749-1751	34(22) %	43%	70%	34%	68(28) %	72(61) %	72(41) %
1786-1789	42(24) %	50%	77%	28%	70(29) %	75(76) %	74(38) %

ここでは3つの時期の職業別の識字率が詳細に示されている。男性については石工以外は、1728年時点ですでに高かった識字率が徐々に上昇していることが観察できる。また1749-1751年には若干低下しているとはいえ、パン屋と絹織職人の妻の識字率が高く、とりわけパン屋の妻は夫とそれほど変わらず、革命前にはむしろ高いくらいである。恐らくこれらの職業を持つ商店では、客からの注文を取ったり帳簿をつけたりと、切り盛りは女性である妻が夫に代わってやっていたのであろう。また別の職業にも目を通してみると、歩兵隊・騎馬隊・竜騎兵隊にいる200人の大佐の内、少なくとも半分の者が読み書きをすることができたという当時の軍の識字率の状況が、1771年に出版された『鎧を着けた新聞屋』の中でシャルル・テヴノー・ド・モランドによって伝えられている³⁴⁾。だがこれらの職業別の識字率の統計は、ある特定の地域だけを対象とした極めて限られたものであるだけに、他の地域における職業別の識字率は判別できないのも確かである。しかしながら、最初に調査した17・18世紀末における識字率の統計をも考慮すれば、民衆の構成員である商人から職人、農民、日雇い労働者に至るまで、たとえ僅かながらであっても1世紀の間に読み書きができるようになる者が増えていった、ということは推測できる。

さてこの2つの章では、フランスにおける17世紀末から18世紀末まで

そこでは非識字率（文盲率）によって示されていることから、それぞれ100%から逆算して識字率を算出した。

34) ロバート・ダーントン、前掲書、41-42頁からの引用による。Voir Charles Théveneau de Morande, *Le Gazetier cuirassé, ou Anecdotes scandaleuses de la cour de France*, « imprimé à cent lieues de la Bastille, à l'enseigne de la liberté », 1771, p. 128.

の識字率を中心に調査をした。だがこの統計に関して付け加えておかなければならないことがある。それはロジェ・シャルチエが警告しているように、「人々の読書能力を、これまでの古典的な研究が明らかにしてきた識字率に矮小化して考えることはもはや許されない³⁵⁾」ということである。そしてその理由として、署名することができる者は間違いなく読めるのに対し、逆に読める人たちが全て書けるというわけでもない、従ってアンシアン・レジームにおいて文字を読み文章を理解する人々の潜在的な数は、署名の数から想像されるよりも恐らく多いであろう、とこの批評家は述べている。さらに彼によれば、とりわけそれは民衆層に当てはまる事実なのである³⁶⁾。またロルフ・エンゲルジンは別の角度から見解を述べている。この批評家は農村の朗読会を例にとり、1人の農夫が聖書を朗読し、他の9人が耳を傾け、仮にこの9人の聴衆が文盲だとしても、朗読者だけを聖書の読者と見なすことは不合理であろうと、読者というものの定義に疑問を投げかけている³⁷⁾。確かに聞いているだけの者をも読者と見なすべきか否かという問題は、識字率の問題とは別の次元であるようにも思われるが、この批評の中で大事なことは、読んで聞かせる農夫がいたという事実の方である。同じように、ロバート・ダーントンもフランスの農村に言及し、村の集いでは文字を解する者が読むこ

35) ロジェ・シャルチエ、前掲書、92頁。

36) 同書、92頁。

37) ロルフ・エンゲルジンは、前掲書、107頁。一方、長谷川輝夫は蔵書目録に目を向け、フランスの都市部の商店主、職人の親方、平職人、家僕、日雇い、労務者といった民衆は、10人につき2人程度しか書物を所有しておらず、10冊を越えることは稀であって、ほとんどの場合は1冊のみであって、しかもそれは宗教書であったと述べているが、だからといってこの事実から民衆が文字を読むことができない、ということにはならないであろう。ただ革命期にはバリの民衆の間でも書物を持つ者が増えたと、長谷川は付け加えている。長谷川輝夫「書物の社会史と読書行為」(ロジェ・シャルチエ『書物の秩序』、長谷川輝夫訳、文化科学高等研究院、1993年、259頁)。

とのできない者たちに青表紙本を読んで聞かせていた、と述べている³⁸⁾。これらの報告から、農村でも読書というものに興味を持つ農民が少なからず存在していた、ということが分かる。そして18世紀中葉の民衆と読書の関係について、当時の状況を自らの目で確かめたダルジャンソン侯爵が貴重な証言を残している。

50年前には大衆は国家に関するニュースなどには何ら関心も示していなかったが、今日では誰でも、地方でさえ『パリ文芸新聞』を読んでいる。彼らは政治についてはでたらめに議論しているが、政治のことに専心しているのである³⁹⁾。

この報告が1750年頃になされたことから、50年前とは18世紀初頭を指すのだが、当時自分の国のことなどには目もくれなかった民衆が、半世紀を経た今、自国の政治について何かを知ろうと新聞を読むことに夢中になっているのである。国務評定官を務めたのち外務卿として他国に赴く際、さまざまな地方を通して現状を目にしてきた侯爵のこの証言から、18世紀中葉にはすでに少なからぬ民衆が読む能力を獲得していた、ということが確認できる⁴⁰⁾。

ところで、ダルジャンソン侯爵のこの報告では新聞が民衆の読み物の

38) ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』、海保真夫・鷺見洋一訳、岩波書店、1986年、81頁。

39) René-Louis de Voyer de Paulmy Argenson (marquis d'), *Mémoires et journal inédit* (vers 1750), t. I, publ. et annot. par M. le marquis d'Argenson, Nendeln et Liechtenstein, Kraus Reprint, 1979 [Paris, 1857], p. 137.

40) 実際ヴォルテールがこの事実を知り得たかどうかは定かではないが、ダルジャンソンとはルイ・ル・グランの同級生で、侯爵が亡くなる1757年まで親交を続けていたということを考えれば、たとえ彼がこの実情を信じていないにしろ、侯爵から聞いていた可能性は否定できない。従ってヴォルテールは1750年頃から民衆と読書との関係に対して徐々に意識し始めた、とも考えられる。

対象として挙げられているが、実際は先ほどロバート・ダーントンが言及していた「青表紙本（青本叢書）」⁴¹⁾ と呼ばれる行商本が、最下層の間では最も流布していた印刷物であった。ロジェ・シャルチエは歴史家たちの意見には反対しているものの、彼らは青表紙本こそが18世紀の民衆文化を表現しかつ培っていたと主張しているほどである⁴²⁾。そしてこの安価な小冊子は、一般には植字工か匿名の三文文士の手による中世時代やルネッサンス時代の「高等な」文学の翻案であった場合が多かったが⁴³⁾、一方このジャンルは宗教書、実用書、物語、小説、コントをも取り扱い、従って学識文学の全てのジャンルに属していたということにもなる。ただしこの読み物においては、既刊の諸々のテキストの中から、広範な読者の期待に最適だと判断されたテキストのみが選び出されるという方法が用いられていたこともあり、作品が短縮されたり、単純化されたり、切り取られたりと、さらには短い断片が重ね合わさせられたりもした。しかしながら、それでも青表紙本は民衆からなる多くの読者を獲得し、しかもその民衆である読者は多様でかつ時代によって変化していったことも確かであったと、ロジェ・シャルチエは青表紙本の民衆に与える大きな影響を強調しながら結論を下している⁴⁴⁾。このようなフランスの状況を見て口にしたのかどうかは分からないが、ルソーも『新エロイズ』の中で、フランス人と読書との関係についてドルブ夫人に言わせている。「フランス人は非常に本を読みますが、新しい本しか読みません。いえむしろ彼らは読むというよりもざっと目を通すだけなのです。それは自分たちが読んだということを言い触らしたいただけなのです」⁴⁵⁾。ルソー一流

41) ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』、前掲書、81頁。

42) ロジェ・シャルチエ『書物の秩序』、前掲書、42-43頁。

43) ロバート・ダーントン『歴史の白昼夢～フランス革命の18世紀～』、海保眞夫・坂本武訳、河出書房新社、1994年、234頁。

44) ロジェ・シャルチエ「書物から読書へ」、前掲書、128頁及び133頁；ロジェ・シャルチエ『書物の秩序』、前掲書、43-44頁。

45) Jean-Jacques Rousseau, *Julie, ou La Nouvelle Héloïse*, dans *Œuvres complètes*, t. II, éd.

の皮肉に満ちた発言であるとはいえ、それでもジュネーヴ人の目から見ても、フランス人は多読家に思えたのである。以上、署名に基づいた統計によって識字率を調べたのであるが、ダルジャンソン侯爵やルソーなどの当時の現状を語った生きた情報も、非文盲化の状況を知る上で重要な証拠となり得る、と言えよう。それでは本題をヴォルテールへと戻し、彼と民衆との関係を次章で詳しく見たい。

V. 民衆の理性に対する期待

民衆が読むという能力を徐々に身に付けているということを感じ取ったヴォルテールは、出版の重要性を先ず訴える。ペドロ1世と異母兄弟のトラスタマラとの権力争いを扱った彼の悲劇『ドン・ペドロ』は、1761年にはすでに書き上げられていたものの、1775年になって初めて出版された。ヴォルテールはこの作品の献辞の中で、作者を1人の青年に仕立て、当時のことを振り返っている。

彼 [青年=ヴォルテール] は劇場でこの戯曲を上演しようという野心を抱いてはおりませんでした。[...] その上彼は私に言っていました。劇場での成功は俳優や女優に完全に依存していますが、読書においてはその成功は公正で厳格な判断にしか依存していません、と⁴⁶⁾。

自分の悲劇が活字になることで『ドン・ペドロ』を的確に評価してもらいたい、という劇作家としての願いを抱くと共に、読むという行為は読んでいる者に公正な判断力を与えるのもであると、ヴォルテールは考えていたのである。『ドン・ペドロ』の執筆から3年後の1764年に創作され

Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1961, 6^e partie, Lettre V « de Mme d'Orbe à Mme de Wolmar », p. 660.
46) *Don Pèdre*, « Épître dédicatoire à M. d'Alembert » (1775), éd. Marie-Emmanuelle Plagnol-Diéval, OC, t. 52 [2011], p. 106.

た悲劇『三頭政治』の序文でも、ヴォルテールは偽名を用いてこう見解を述べている。

私はこの悲劇に、私の考え方と幾人かの読者との考えにより近いものを見出しました。それは大きな変革を描いた描写よりもむしろ、それをなした人間の描写の方がよいという考え方です。もしこの悲劇がオクタヴィアヌスとポンペイウスの青年との恋愛しか問題にしなないのでしたら、私は注釈も印刷もしなかったでしょう⁴⁷⁾。

ここでいう変革とは紀元前27年に初代ローマ皇帝となったアウグストゥスが成し遂げた改革のことを指しているのであるが、ヴォルテールはむしろ彼が皇帝になる前のオクタヴィアヌスの振る舞いをこの悲劇で描いている。『三頭政治』では、オクタヴィアヌスの勧めで彼の姉オクタヴィアと再婚するため、夫から離婚を言い渡されたアントニウスの妻フルウィアが、カエサルの子に激しい恨みを抱き、大ポンペイウスの息子セクストゥス・ポンペイウスにオクタヴィアヌスに対して謀反を起こさせる。結局2人の陰謀は失敗に終わるのだが、カエサルの子はアントニウスの反対を押し切って、セクストゥスとフルウィアを許すことに決める。つまりヴォルテールはこのオクタヴィアヌスの行いを読者に示したかったのであり、またこうした振る舞いに読者は共感を覚えるものと信じていたのである。従って彼は観客よりも読者を強く意識していたと言える。また恋愛だけが主題の悲劇は人々の教育には何ら貢献しない。彼にとって読むという行為は学ぶということを意味しているのである。この考えをヴォルテールはダルジャンタル伯爵夫妻に表明している。

私は『護教論者についての批判的試論』という書物の作者がフェレかどうかは自信が持てませんが、この書物は […] 最も優れた作品で

47) *Le Triumvirat*, « Préface » (1764), *M*, t. 6 [1877], p. 178.

あるということは確信しております。地方ではこうした作品で満たされていますが、あなた方はパリにいてもそれほど幸せではありませんね。パリっ子たちが地方の人に抱いていた軽蔑に対しまもなく復讐する日が来るでしょう。そこでは気晴らしが少ないだけに、それだけ読書をして自己を啓発する時間が多いのです。私は10年経ってもトゥールーズでは寛容が確立されないなどと絶望してはおりません⁴⁸⁾。

地方と読書について述べられているこの書簡には、読む能力を獲得した地方の民衆も書物を通して都会の人々と同じように啓発されるだろう、というヴォルテールの期待がはっきりと見て取れる⁴⁹⁾。ところが彼のこのような態度に対して、民衆が読書することに彼は危惧を覚えていたのだと、アルベルト・マンゲルは指摘している。この批評家はその根拠として、1765年に出回った「読書の恐るべき危険性について」というヴォルテールの諷刺パンフレットの次の一節を引き合いに出している⁵⁰⁾。

思想を伝えることを容易にする読書というものは、見事に文明化を遂げた国家のために、番人として防壁としての役割を担っている無知を、吹き払ってしまうことになるのは明らかなことです⁵¹⁾。

48) Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 22 juin 1766, GC, t. VIII, p. 512.

49) 書物の普及に関してロバート・ダーントンは、ルイ15世の治世の末期には、印刷物に対する要求が王国の津々浦々にまで広がっており、読者はどこにいてもニュースを求めている、と指摘している。ロバート・ダーントン『禁じられたベストセラー——革命前のフランス人は何を読んでいたか』、近藤朱蔵訳、新曜社、2005年、217頁。またダニエル・ロッシュは、あらゆる職業の民衆が読書をするようになったことを強調するために、「書物や雑誌は書庫から調理場へと流れてゆく」という表現を用いている。ダニエル・ロッシュ、前掲書、258頁。

50) アルベルト・マンゲル、前掲書、307頁。

51) *De L'Horrible Danger de la lecture* (1765), K, t. 46 [1785], p. 66.

マンゲルの解釈に従えば、国家の安寧を保つためには民衆を無知の状態にいつまでも留めておかなければならない、なぜなら彼らが書物を通して知識を得たならば国家に対して歯向かうようになるからだ、とヴォルテールは主張しているということになる。しかしながら、フェルネーの長老は次にこのように述べていた。

西洋に運び込まれた書物の中に、農業や工芸に関する書物が何冊か存在することは恐れるべきことなのです。これらの書物は時が経つにつれ、そんなことは断じてありませんように！我が国の耕作者や工場主の持つ素質を目覚めさせ、彼らの職業を活気づかせ、彼らを豊かにさせ、そしていつの日か、精神の向上や公共善に対する愛、神聖なる教義に断固として異を唱える感情を吹き込んでしまうことになるからなのです⁵²⁾。

この発言からヴォルテールが、読むことで知識を獲得する民衆に対し心配を装いながら、実は読書によって彼らが啓蒙され、いつの日か社会のために貢献してくれることを願っているということは明らかである。なぜなら啓蒙や公共への貢献、そして不寛容に勇敢に立ち向かうことの重要性は、まさにフェルネーの長老が常日頃から、さらには生涯唱え続けていたテーゼだからである。そしてダニエル・ロッシュも、受動的に読むだけでは、社会的かつ宗教的な現実への関係を問い直すまでには至らないと、読むという行為を否定的に捉えているが、ヴォルテールの先ほどの発言を見れば、真偽はともかくとして、彼が読書に絶対的な信頼を置いていたことは明白で、彼が民衆の啓蒙を望んでいなかったとは到底考えられないであろう⁵³⁾。

それではどうしてヴォルテールは、読書によって知識を得た民衆にそ

52) *Ibid.*, pp. 66-67.

53) ダニエル・ロッシュ、前掲書、256頁。

れほどまでの信頼を置くことができたのであろうか。この答えはダランベールへの書簡に見出される。

私は巧みに理屈を述べた者としてはスピノザしか知りません。しかし誰も彼を読むことはできません。人間に誤りを悟らせるのは形而上学ではないのです。事実によって真実を証明しなければなりません。我々はおよそ30年前からこの種のよい書物をたくさん持っています。これらの書物は必ずや大いに役に立つのです。理性の進歩は我々の地方でも急速に広がっております⁵⁴⁾。

ヴォルテールは有益な書物を読むことで理性が培われると信じていた。しかもこの書簡が書かれたのは貧しい多くの農民たちが占めていたフェルネーなのである。だが今やこの農村の地でも彼らは読むことを覚え、彼らの中に理性が芽生え始めていたのだ。こうした喜ばしい現実がフェルネーの長老に民衆に対する信頼を生まれさせた大きな原因と考えられる。そして注目すべきは、フェルネーの長老は民衆の理性に関して、ちょうど10年前の1763年に出版された『寛容論』の中で言っていたのである。

たとえ城壁外の片隅に何人かの痙攣派がいたとしても、それは虱のように移るもので、このような病気に罹るのは最も卑しい最下層の者たちだけである。フランスでは理性が日ごとに商人の店にも浸透している。従ってこの理性の果実が実るのを防ぐことができない以上、これらの果実を育てねばならないのである⁵⁵⁾。

痙攣派とは狂信的なジャンセニストたちを指し、もちろんヴォルテールは全ての人間に理性が照らされたとは楽観的になってはいないが、こ

54) Lettre à d'Alembert, 16 juin 1773, GC, t. XI [1987], p. 383.

55) *Traité sur la tolérance* (1763), OC, t. 56C [2000], éd. John Renwick, chap. 20, p. 244.

で彼は今までのように単に下層民と呼ぶのではなく、最も卑しいという形容詞をつけている。つまり彼の中ですでに民衆の区別がなされていたと言える。何より商店とは民衆が行き交う場所なのである。1769年のリヨン学士院院長への書簡ではこう述べられている。

私が死んでいようと生きていようとあなたに会いに行きます。もし私がリヨンで死んだとしましても、リヨンの偉大なる助任司祭の方々は私の埋葬を拒むことはないでしょう。またもしまだ私が生きているのであれば、それは「…」哲学のことよりも製造業に忙しい町においても、理性の果実が実るのかどうかを確かめるためなのです⁵⁶⁾。

この「かどうか」という言葉には可能性の低さを心配するヴォルテール様子は見られない。むしろ理性は職人たちの間でも十分に浸透するであろう、という確信がこの発言から読み取れる。同時にこの身が滅びても、理性が目覚めたりヨンの民衆を草葉の陰からでも見届けてやるぞ、という強い思いまで感じられるのである。そしてちょうどこの書簡が書かれた1769年に、彼は悲劇『拝火教徒』を出版する。兄弟である軍団司令官のイラダンと彼の補佐官セゼーヌが主人公のこの作品は、上演されることはなかったが、ヴォルテールは悲劇の目的を語っている。

最も優れた作品以上に最もひどい作品に、大変しばしば惜しみなく与えられる劇場での虚しい喝采など、著者 [=ヴォルテール] は求めはおりませんでした。彼は乏しい才能しかありませんが、その才能を最大限使い、法を尊重する気持ち、普遍的な慈悲の心、寛大さと寛容を吹き込もうとそれだけを望んでいたのです⁵⁷⁾。

56) Lettre à Charles Bordes, 30 octobre 1769, GC, t. X [1986], p. 21.

57) *Les Guèbres, ou la tolérance*, « Discours historique et critique à l'occasion de la tragédie des Guèbres » (1769), éd. John Renwick, OC, t. 66 [1999], p. 501.

ここで改めて、印刷された悲劇でも啓蒙できるという読書の重要性が力説されている。というのも、優れた作品は民衆の理性を育み人間らしくすると信じていたヴォルテールの中には、このように啓発された民衆が結集し力を合わせることで、最終的には世の中は良い方向へと向かうことができる、という確信があったからである⁵⁸⁾。もちろんそこには、民衆が読むことができるようになった、という現実が根底にある。それでは最後に、民衆の力を最大の武器と考えるフェルネーの長老の見解を考察するが、このような考えはとりわけ悲劇作品の登場人物の口を借りて多く見出されるであろう。

VI. 民衆に懸ける思い

前章で引用した1764年の『三頭政治』の序文で、ヴォルテールはこうも述べていた。「常に大衆の判断を待たねばなりません。しかし著者 [=ヴォルテール] は観衆よりも読者に向けて書いているように思われます」⁵⁹⁾。この悲劇は、肅清を強行する2人の統治者を通してフランスを批判していることもあって、当然当時の宮廷には受け入れられ難いものであったのだが、民衆が読むことで世の不正に声を上げてくれるだろうと、彼らの判断力にヴォルテールは期待を寄せているのである。さらに彼は1766年のグリムへの書簡と、1773年のラリ＝トランダール騎士への書簡で具体的に自分の考えを示している。

私がいいつも審判者と見なしているのは公衆なのです。彼らはしばしば劇場では過ちを犯しますが、社会に関わる事件では、彼らは常に正

58) ジャン・エブラールは読書教育の有効性について語っている。彼によれば、読むという行為が持つ力は無限であって、社会集団の価値や習慣を変容させ、信仰や迷信といった古いモデルを読書だけが破壊できるのである。ジャン・エブラール、前掲書、30頁。

59) *Le Triumvirat*, « Préface », *op. cit.*, p. 179.

しい立場をとるのです⁶⁰⁾。

民衆の声があなたの声と結びつくのを聞いてあなたは慰められることでしょう。そして、この全員の叫びが正義を呼び起こすことになるでしょう⁶¹⁾。

この書簡はどちらも冤罪事件について述べられているのだが、民衆に対して全幅の信頼を寄せているヴォルテールの姿が確認できる。何よりこの彼の態度はすでに『ドン・ペドロ』と『三頭政治』の戯曲の中で見出されるのである。

民衆の意見は強力な武器なのだ。

私はその矢を鋭くしよう⁶²⁾。

人間たちの叫びによって我々も武装を解こうではないか。

そしていつの日かローマが我々を愛することができるように⁶³⁾ !

最初の『ドン・ペドロ』では王の庶子トラスタマラが民衆の世論を味方につけようと考え、『三頭政治』では民衆の声に応じて粛清をやめることをオクタヴィアヌスは決意する。また『ドン・ペドロ』に関しては、アカデミー会員のペロワが1772年に『残酷王ペドロ』という題で同じ主題を扱っているが、そこではペドロに虐げられている民衆への同情が際立っている。さらに1754年のクレピヨンの『三頭政治』にいたっては、民衆には何ら関心も向けられずキケロの祖国愛だけが中心となっている。

60) Lettre au baron Frédéric Melchior von Grimm, 13 juin 1766, *GC*, t. VIII, p. 499.

61) Lettre au chevalier de Lally-Tollendal, 24 mai 1773, *GC*, t. XI, p. 362.

62) *Don Pèdre*, *op. cit.*, I, 1, v. 101-102 [Transtamare].

63) *Le Triumvirat*, *op. cit.*, V, 5, v. 1343-1344 [Octave].

これらを考慮すると、ヴォルテールの両作品は民衆の方への期待を強調しているのは明らかである。さらに1771年の『ペロプス』には、民衆の理性に期待を寄せる場面がある。アエロペを結婚式の当日に奪われた兄アトレウスは、弟であるテュエステスから彼女を奪いに行く。その結果、2人の兄弟は刀を手に取り激しく争うこととなる。最初は民衆も二手に分かれて兄弟たちの戦いに参加していたが、仲裁に入った元老院議員を見た彼らはすぐに正気に戻り、彼らの口からは平和と叫ぶ声が最後には飛び交う。この光景を見たペロプスの息子たちの師傅であるポレモンは、彼らの母親のヒッポダメイアにこう伝えている。

いつか我々の国では民衆が

王たちの模範となるに違いありません。

理性の声が最終的に至る所で響き渡る時、

あなたのご息たちもその声に耳を傾けることでしょう⁶⁴⁾。

王家の血を引く継ぐアトレウスとテュエステスよりも、民衆の方が模範的な存在なのである。またポレモンは、2人の息子に絶望ばかりしている母親にこう力説していた。

あなたが何とおっしゃろうと、我々は己の運命は自力で切り拓くものなのです。

人間は理性によって自分に何らかの王国を築くのです⁶⁵⁾。

ポレモンは理性による人間の更生を信じているのである。この『ペロプス』についても、セネカとクレピヨンがすでに書いている。セネカにお

64) *Les Pélopidés, ou Atrée et Thyeste* (1771), éd. Michael Hawcroft et Christopher Todd, OC, t. 72 [2011], II, 1, v. 31-34 [Polémon].

65) *Ibid.*, I, 1, v. 67-68 [Polémon].

いてはアトレウスの残虐さだけが際立っており、クレビヨンでは兄弟愛が強調されているものの、やはりセネカ同様アトレウスの冷酷さが目立っている。従ってヴォルテールの作品は、ここでも民衆の力に対する期待が特徴的と言えることができる。

この独自性は1778年のヴォルテールの最後の悲劇である『アガトクレス』に引き継がれる。シチリア島シラクサの僭主の息子アルジードは打ち明けている。

さらに私は思い切って言おう。

公正で誠実な大衆の声が、
父親の激しい拒絶から私を慰めてくれるのだ、と⁶⁶⁾。

アルジードは、極悪非道の兄弟であるポリュクラテスを溺愛し後継者にと考えているアガトクレスから冷酷に扱われながらも、民衆の声で父親の目が開く日が来るだろうと信じているのである。さらにアルジードは捕らわれの身であるイダースを救うため民衆に叫ぶ。

気高きシラクサの人々よ。無実の者を救いに行くのだ。
彼女の強奪者らに対し彼女を守るのだ⁶⁷⁾。

イダースを奪った主犯はポリュクラテスなのだが、アルジードは民衆と共に彼女の下に駆けつけ彼女を無事に救出する。また父親であるアガトクレスは、民衆に敬愛されているアルジードについて自問している。

彼の民衆の人気が私を脅かしていたに違いないのだ。

66) *Agathocle* (1778), éd. Christopher Todd, *OC*, t. 80C [2009], II, 3, v. 140-142 [Argide].

67) *Ibid.*, II, 4, v. 173-174 [Argide].

彼はとりわけ愛されながら私を侮辱していた。
彼の名は私の栄光の瓦礫から高まっていったのだ⁶⁸⁾。

アルジードは父親の冷酷な態度に対し、謀反を起こす気は全くないのである。逆に父親が息子を恐れるようになるのである。それだけ民衆の影響力の強さをアガトクレスは自覚しているからだと言えよう。そしてついにアガトクレスは次のように民衆に宣言する。

私はお前たちの国家では無名の者として生まれた。
私は卑しい身分であった。私をお前たちの王にまでした才能と勇気を、
私は自分にしか負っていない。
私には名高い生まれなど必要なかった。
私の生まれこそが己の偉大さに新しい輝きを加えたのだ。
[…]
栄光とこれほど多くの力で満ち足りた私は、
結局その取るに足らぬ虚しさを感じたのだ。
私は充分すぎるほどそれが分かった。天は我々の心の奥底に
偉大さを越えた感情を置いたのだ⁶⁹⁾。

焼物師であったアガトクレスは、シラクサ王となり名声と権力をほしいままにしたのだが、それらは所詮虚しいものであって、例え有名でなくとも清廉潔白に生きることには勝るほどの名誉はないと気づいたのである。そこで先ずアガトクレスは退位の意向を示し、続いてその決断を聞いた息子も父親の決意に応じている。

68) *Ibid.*, IV, 3, v. 119-121 [Agathocle].

69) *Ibid.*, V, 3, v. 92-102 [Agathocle].

王は消え失せたのだ。人間が生きることを始めるのだ⁷⁰⁾。

私が模倣するのはあなたなのです。

あなたの模範が私に市民として生きる気を起こさせたのです。

あなたは君主の名誉を超越しました⁷¹⁾。

アルジードは王位に就いたとしても、市民の立場で国を治めようと心に決めるのである。だが9年前に創作された『拝火教徒』の中にも、ローマ皇帝ガリエヌスによって「私は市民として考え皇帝として振る舞おう⁷²⁾」という決意がすでに述べられていた。そして『アガトクレス』では、父親から王位を受け継いだアルジードが、王妃となるイダースに向けてこう宣言して幕を閉じる。

おお、私の尊い王妃よ！おお、気高き市民たる女性よ！

この国の民衆はあなたを深く愛しております。あなたは王妃以上の方
なのです⁷³⁾。

王妃という身分は民衆に愛されることで、王妃の地位だけでは得ることのできないそれ以上の価値を持つということなのである。

VII. おわりに

以上、ヴォルテールと民衆との関係を見た。最初は民衆を頭ごなしに軽蔑していた彼は、やがて態度を軟化させるようになる。というのも、民衆が読む能力を獲得し始めている、という事実をヴォルテールは知っ

70) *Ibid.*, V, 3, v. 132 [Agathocle].

71) *Ibid.*, V, 3, v. 143-145 [Argide].

72) *Les Guèbres, op. cit.*, V, 6, v. 279 [Gallien].

73) *Agathocle, op. cit.*, V, 3, v. 155-156 [Argide].

たからである。彼にとって読むという行為は理性を目覚めさせることを意味する。そして、彼は劇作家であったにもかかわらず、たとえ悲劇が上演されなくとも、出版をすることで民衆を啓蒙できると考えるようになった。従って1760年以降に創作された作品を読んでも、登場人物を通して民衆への信頼と期待が至るところで述べられていた、ということが確認できた。そこにはヴォルテールがその力を信じ必要不可欠とした、民衆に対する強い呼び掛けの思いが込められていたのである。本論を終えるにあたって次の彼の2つの言葉を引用したい。

なぜ私が車刑に処されたあのカラスに、これほどまでに関心を抱くのか、とあなた方は恐らく私に尋ねることでしょう。それは私が人間だからです⁷⁴⁾。

彼ら [= 農奴] を助けなければなりません。彼らも人間なのですから⁷⁵⁾。

もはやここでは民衆や下層民という垣根を越えて、ヴォルテールは彼らも自分と同じ人間であることを認めている。そして人間は他の人々を助けなければならない存在なのである。だからこそ彼らにも社会に貢献するための力は十分備わっている、とヴォルテールは考える。このような彼の発言の中においても、民衆に対して期待を寄せるフェルネーの長老の真意が見て取れるのである。

(本学非常勤講師)

74) Lettre aux comte et comtesse d'Argental, 27 mars 1762, *GC*, t. VI [1980], p. 845.

75) Lettre au marquis de Condorcet, 27 janvier 1776, *GC*, t. XII [1988], p. 403.